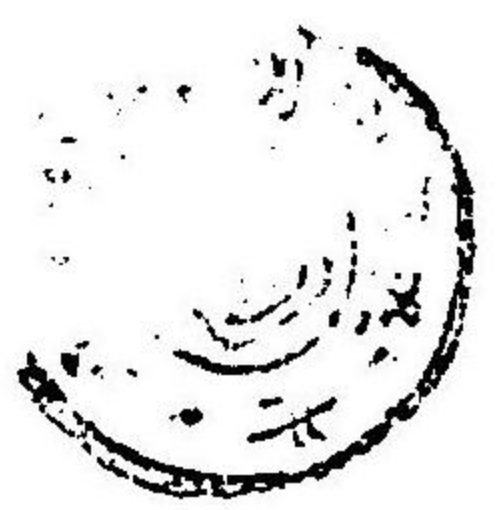




『マセラ』著者
ハムフリー、ワード女史

女史作『マシーラ』の梗概小引



『マシーラ』の作者ハムフレッド夫人 (Mrs. Humphry Ward) は、教育家として、又多數の歴史家として、十九世紀前半の英國教育界に、偉大なる感化を與へし、レクヒール學校の校長トマス、アーノルド翁の孫女にして、又實に英國近代思想の嚮導者として、優美なる散文家として、道念の高潔と閑雅典麗の詞賦とを以て名高き詩人として、温籍澄明なる批評家として、又最も脩養ある紳士として、其名一代に噴々たりしマシーラ、アーノルド先生の姪女にて在す。

夫人の父君にして、祖父の名を襲ひ給ひしトマス、アーノルド氏も、父兄と同じく一生を青年の教育に捧げ給ひし人なりき。此の人始めは英國監督教會に屬せしが、中頃にして、ニューマン僧正の感化を受けしにやあらむ、籍を羅馬教會に遷しぬ。然るに數年の後、羅馬教會を去て、又々英國教會に復歸せしが、又もや教理の君の信念を満足させざる結果にや、遂に意を決して、再び羅馬教會に復籍し給ひしが、去年の

秋、一葉風に散るところ、忽然として白玉樓中の人と化し去り給ひぬ。又夫人の真人にて在す、ハンフレード氏は、牛津堡大學出身の有名なる英文學者にして、其著『英國大家詩集』四卷は英詩を研鑽せむとする人々の唯一の好伴侶たり。現にタイムズ新聞の美術欄の批評をば擔任し給ひ同紙上に光彩を添へ給ふ。抑もソール夫人の美文に指を染め給ひし處、女作は、我が知るどころを以てすれば、彼の有名なる「Robert Lismere」にして、此作一度出て、女史が出類の技、起群の能、遍く人の知るところとなり、他の鬚髯の作家をして、更に顔色無からしめ、世はエリオット女史の再來とまで讃めそやしぬ。

女史常に宗教の信條若しくは教會の禮式等の寧ろ外面的虚禮に過ぎざることを痛言し、宗教の精神は右の如き外面的の物にあらずして、其倫理的なると、人間的なるとにあるを明にし、當時英國に鬱勃として未だ噴火口を得ざりし人間的、倫理的、宗教觀の急先鋒を以て任じぬ。『エルスミヤ』の一編は斯かる目的を以て世に出し、故に、一面には從來の保守派の徒らに教典の文字に拘泥して其精神を解せざるに厭き去りし有識の人士の間に勸迎されしと同時に、他の一面には、狹隘なる思想と、

守舊の頭慮とを有せる一部の人によりて異端視せられ、一時英國思想の静けき海に、時ならざる怒濤を起さしめぬ。是より引續いて女史の筆益、健に、世に公にせられしものは「History of David Grieve」「Marcella」「Eleanor」其他數種あり。

『マーセラ』に付ては、本號より掲ぐるところの梗概、臆氣ながらも、此作の隠微のあるところと、大體の筋道とを紹介し、あたはむ故に、我は爰に無用の辯を費さじ、されど只一語の筋の葉として云はむに、本編の目的は社會改良の舉たるや、知識あり、財産あり、而して同情ある上級の人々と、正直なる、熱心なる、下級の者との力を協せて徐々に爲さるべき事にして、彼の所謂正義を賣物にする挑發的煽攘家、若しくは義憤を旗號として陋にして無知なる労働者等の爲にさるべき事柄にあらざるを示すにあり。其間一貫の情活あつて、高尚なる英國の紳士と淑女の戀を曲盡し、又英國政治社會の裏面の情狀を摸寫す。實に原文の巧處、沙處讀者として應接に追あらざらしむ。

我は此の小引を終らむとして一言左の二君に謝意を表す。一は光風樓主人横井時雄先生にして、我が爲にアーンホルド氏の家系に管して詳細なる教を賜はり。他

は本綱要の編輯主任孤島中島君にして、我と共に本梗概を草するの勞を採り給ふ。

(千葉掬香謹)

ワロド『マーセラ梗概』
女史作

第一

(一)

『あの霧……あの日……あの黄ろい山毛櫨の線條……あの美くしい、美くし
50』

見渡す限り一帯の廣庭。松、山毛櫨の大木は、幾代の名残を蒼鬱たる緑の蔭に浮
べて、中に檜の一本二本盪々と澄み渡る秋の空を凌ぐ。一道の路は蔭に隠れ、稍を
出で、遙かに目路の彼方に盡き、左には森を隔て、一面の畑、霧を破りて注ぎ來る
金色の日を浴びて、はや收穫時の美しく輝やけり。

繁榮と威嚴との化身とも覺えつべき、此美はしき静けき景色を、窓に凭りて我に
もあらず眺め居たるマーセラは、其熱し易き心には、や無限の歎びを湛へたり。

父リチャード、ボイスがボイス家の家督を襲いで、此メロアの莊園に入りしは、六月

中流のとなりき。ケンシントンの寄宿舎に此嬉しき報知の達せし時より、マーセラの心は早くも此莊園の邊りに彷徨ひて、日々の課業も手に着かざりしが、今より六週間ばかり前漸やく茲に喚び迎へらるゝとはなれり。

恍惚として際なき彼方に注ぎ居たる眼を、壁の如く道を蔽へる樹立満たる如き山毛櫨の茂みより、やがて窓の下なる砂利の其處此處に見る者もなく生ひ出でし雑草の花に移したる時、マーセラの眉根は何となう曇を帯びて、力なげに窓近き床几に身を落せしが、再び身を起して庭前の光景に向へる時は、満足の色またも其顔に漲るを見たり。

かゝる美はしの景色に對しても坐ろに浮び來るは貧しかりき曠昔の夢なり。今は、はや衣裳に、金錢の其他あらゆる交際に、同輩の嘲りをのみ氣遣ひし我にあらざ。花ならば陽春三月雲を浮べたらんが如き廿一歳の女盛り、中部英吉利の名族ボイス家の一人娘、宏壯なるメロア莊園の世嗣なり。只管に過ぎにし事共を忘れんとは思へど、緑滴たる庭前の景色を美はしと眺むる間にも、心はやがてありし昔の幻を辿る。

懐かしき母の笑顔、美はしく廣やかなる倫敦の家居の様、華々しき誕生日の祝ひなど、夢の如く覺えぬにはあられど、さて我身は如何にして此樂しき父母の膝下を離れて、冷やかなる浮世の風に晒さるゝに至りしか、思へばいと覺束なし。今もまごゝと浮び來るは、温かき倫敦の家庭を離れて、五年の月日を送りたる、思はしき學舎の記憶なり。

髪長く、眼清しきマーセラが、フレデリック嬢の管理せる崖際の學舎に送られしは、其九歳の春なりき。あはれ此事は鈍からぬ、我儘育ちの身に取って如何に劇しき打戟なりしぞ。暫くにして彼は塾中の稽まれ者となりぬ。師に懐かず、朋友に愛されず、獨り不平を抱いて寢室に籠りしとも屢々なりき。

一を聞いて十を知るの才ありしとはいへ、マーセラはいたく課業を嫌ひたり。病と稱して寢室に籠る折々は、誠に淋しく心細き限りなりき。去れど彼は好んで此道を撰び、獨り空想を逐ふて自ら慰めたるとも決して珍らしからざりき。師に

對し、友に對し、あらゆる物に對して、苟くも不平の斷間なく、飽までも辭み、飽までも拗めて、彼は此五年の生涯を送りぬ。

さはれ、此間にもまた一道の光なきにはあらざりき。校内の助手にして佛語の教師なるリニア嬢は妹の如く彼を愛し、牧師エルラートン夫妻は我子の如く慈しみぬ。スコット、リットン等の小説はまた如何に淋しき彼が心を慰めたりしぞ。かくてマーセラの胸も次第に和らぎ來れり。

世にも嬉しかりしは十四の春の卒業式にリニア嬢が心を籠めたる贈り物なりき。白きマズリンの衣裳と紫のリボンと。初めて手を此賜物に觸れたる時、例の不平の心はむら／＼と湧き來りて、人は皆父母よりの贈り物に綺羅を飾る中に、吾のみは……と再び床に打伏せしが。やがて其鮮かなる白色と、目覺むるばかりなる紫色の目を射りし時は、忽ちに賤しき不平の念を忘れて、いそ／＼と式場に上りたり。彼が燃ゆるばかりの感謝を籠めて、リニア嬢に接吻せしは此夜のことなりき。

父リチャードが初めて學校を訪ひたるも此年なり。學校の様は痛くも父の心を

打ちたり。一月ばかりにしてマーセラは叔母なる人の助言にて更にソールズピの學校に移さるゝととなりぬ。茲に送りし五年の月日はいとも幸福なりき。フレデリック嬢の邪見なりしに引換へて校主ベムバートン嬢の柔和に親切なる教導は、流石にマーセラが愛敬の情を惹くに至りしが、故ありて、ベムバートン嬢が此の學校を疊みて印度に赴ける後は、更に轉じてサウス、ケンシントンの學舎に音楽と繪畫とを脩めたり。

ケンシントンの二年は、マーセラが生涯に消すべからざる印象を留めたり。美術の脩養は充分に他人の技藝を批評し得る程になりき。されどケンシントの生涯より得たる所は美術にあらざりき。マーセラが友なる女子の同胞にして、是も美術家ながら社會主義に熱冲せる二人の兄弟と交はり、其議論をも聞き、マルクス、ラザール等の著書をも讀みたるは此間なり。社會主義の根は此時より異しくも深く／＼彼が心の底に潜み入りぬ。

メロア莊園を嗣げりとの報、突然に父の許より達したる時の思ひは如何なりしぞ。停車場にて夫の三人の兄妹に別れたる時の様、今も尙眼前に見るが如し。彼

等は猜疑の眼を以て我を睨みぬ。我は獨り自ら誓ひぬ。「メロアにも貧しき人は住むべし、——よし我が爲す所を見よ」と。

* * * * *

朝食の鈴は幾世の古音を載せて室より室に響き渡りぬ。回想の夢を破られて、マーセラはやをら食堂に下り行きぬ。足の運びもいと重々しく。

掬 香 野 客 述

(一)

ポイス家の食堂は美つくしき花園に添へる支那室(chinese room)と呼べるところに設けられたり。十八世紀の中ごろ、富みたる妻をむかえしポイス家の祖先が其妻の意をくみて専ら其當時の英國人の心に書き出されし東洋古國の面影をつとめて寫し出さむと企し名残とて、流石に好事の跡あらはれて、マーンテルピースの上には辯髪をいたゞける陶器の人形あれば、窓のかたへなる少さき卓の上には種々なる支那製の神像、翫具のたぐい並べをかれぬ。

今しも此の食堂の扉をあけて裡に入らむとせしマーセラは、と見れば朝食の卓には、既に父母の席をしめつゝあり。

ポイス氏「やよ、非リヤムよ、我々に捧ぐる麵包は細にきり持てこではかなはぬものなり。我は如何に給侍する術を汝に教ふる責任なし。サー、非リヤム、ヂュート家にては、如何なる給侍法を汝に傳へしにや。」

此の主人の君の一喝のもとに憐れなる少年非リヤムは急ぎて麵包を細かに切りて、うち震ふ麵包の盆を卓上に置き。コーヒーを持ち來らむと席を辭して厨司にまかりぬ。

主人が常に憐々として、萬事に付けて、不平に絶へざる容ある、また常に口ぎたなく、隸屬を罵しるにひきかへて、マーセラの母なる人はいと物しづかにして言葉少なき人なり。この時何氣なき様にて、

ボイス夫人『給侍の事を辨きまへぬとて、今更君の非リヤムを罵しり給ふは僻事ならむ。彼は元來デュート家に於て鞋を磨く事のみを宗とせしものにて、給侍の任にはあらざりき。我は最初より、もとのまゝにて、婢なるアーンを留めをき給へと勸めしかど、君は我が言を容れ給はざりき。給侍の業はアーンの方こそよく辨えたれ。』

ボイス氏『おらず。我が家の今の位置は僕を使はねば家の体面に關す。知らずや、エゼリン(ボイス夫人の名)我祖宗のこゝに住むものにして、僕を使用せざりしものやある……家の体面を思はざるか。』

と云ふ聲すでに怒を帯びたり。

ボイス夫人『あゝ。我はボイス氏を、名のる人々の如何なる事をなすかと云ふ事に付ては判断を下し得ぬものなり。そは君と近隣の人々との評に譲らむ。』と答うる聲更に落付きていと冷かなり。

ボイス氏は妻との談話の中始めはいと不愉快氣に見えしが、コーヒーの二杯目のコップを呑みほせしころは其氣色も去りて快よき様に見えぬ。此人年のころはい、五十四五にやあらむ、身の丈低かくかつ瘦せ、顔色黒く黄ばみを帯び、其殊に美くしき目は常に沈みがちなり。人となり、氣高く、其流行の服装は更に其人品をうち上がらせて見えしめぬ。

ボイス夫人『やよ、マーセラ、おん身は聞かざりしか、應接室より二階にあがらむとする梯子の下に夜なく、幽鬼の顯るゝ山にて、家の奴婢等の皆身のいとま給はらむと耳語しあへり。こは定めし村人のそゝるごとこそ口火ならめ。我は恐る次なる週間にはおん身と我とのみ只二人して家をば見む事を。』

マーセラ『痴けたる村人かな、彼等の話をば母上には聞かせ給ひしにや。』

ボイス夫人『あゝ、村人の話とは貳百年ばかり前のことにして、ボイス家の祖先の中、極めて心よからぬ人ありて、倫敦にて一方ならぬ大罪を犯し、此の村に逃げ來り、暫時のあいだはひそみ隠れしかど一日公の人々來り探るに遇ひて、此の梯子の下にて身づから相終りぬ。やよマーセラ、何故に彼は梯子の下をば死ぬところど定めしにや。』

とかるく言へば、

マーセラ『そが幽鬼の話の事實とか。そは大なる誤謬なり。其話の中なるボイスなる者非常なる悪人にて、己が罪の許されざるを知りて倫敦に自殺せしはこの家の建てられざる餘程以前の事なり。』

ボイス夫人『さても此の短き月日の中に、おん身はいしくも此家の歴史に通曉せしものかな、おん身誠に家の内なる奴婢のともがらを集めて教訓し、彼等の迷をどくは如何。されど時代の相違の爲に束縛せらるゝところの幽鬼をば我は未だ知らず。』

と自づと冷笑の浪唇頭に浮びぬ。

マーセラ『さらば、我は此由をハーデーンに告げて、かの説の出處を正さむ。思ふに彼の人も村人より既に此の事を聞きしならむ。我は今朝會堂に行かむとする故、かしこにて彼に會ふべし。』

と立ち上るマーセラの様の自づとこのところの貴婦人らしくふるまうを、おつと見やりたるボイス夫人は思はずも微笑みぬ。

ボイス氏『なに、ハーデーンとや我は彼の名をすら聞くと言ひむ。彼何者なれば我に關涉して此の村の給水の道を新しくせよと云ふや。彼は彼れの分を守れ、我は我事にして既に十二分なり。』

マーセラ『そは非なり、父上、此村の給水たるや、實に目も當てられぬ様なり。如何に領主として、地代を收めて而して小作の者の健康を護にする方やある。父上、もし此の地方の官吏にして、吏たるの權威あらば、我は怕る、彼等は父上をして、其意にそむきても何事をか爲さしめずば已むまじ。』

ボイス氏『愚かなる事を、聞け、汝が叔父の世に於ても村人は満足を表しき。今日に於て何故に彼等は満足せざる。我は此荒廢せし庭園と家の終繕にて十二分な

る仕事を有す。我は汝がかくの如きつまらぬ事に付てハーデーンと語るを欲せず。否らず。許るさず。第一に汝の心をそぐべきとは汝の家の事なり。汝の父母の事なり。』

マーセラ『憐なる村人かな。彼等は恰も地獄に落し餓鬼の如し。』
と冷やかに嘲けるが如き調子にて云ひぬ。

この夫と娘との談話を恰かも優人が技を演ずるが如くながめ居しボイス夫人はこの時口をさしはさみて、

『如何にマーセラ、ハーデーンと彼の妹との交際はおん身が倫敦にて親く交りしと聞く社会主義の人々を想ひ出さるや。おん身はいたくハーデーンの家族を好むときく。』

マーセラ『あゝ、母上、我はハーデーンを好む。されど彼の人も餘りに村人の事にはさまで熱心ならず。』

ボイス夫人『さらば社会主義の人々のみ物事に熱心なるにや。我が聞くところを以てすれば、ハーデーンは出来得る限は其資を割きて、村人の爲にすど。このど

ろは更に與ふべき者なく、彼等自づからも受くべき位置にありと。されど我は彼等の今少しくたのしげにふるまはむ事を望む。そは献身者の第一の義務にあらざや。』

凡そ人の心に想像の出来得る限り無情の事を母なる人は云ふとよ。マーセラは怒を帯びて母の顔をうち守りぬ。

マーセラ『樂しげにあれど、此の地獄の如き境にあつて、如何にして彼等は樂しげにふるまい得べきや。母上、ハーデーンの望むところは父上の自づから村中を一週して如何にロード、マクスウエルの領地と我が村との相違あるかを認め給ふにあり。』

此時恰かも半ばぬむりたるが如き迷想に沈みしボイマ氏は口にせし紙巻烟草を暖爐の裡になげ入れて立ち上りながら。

ボイス氏『なに、ロード、マクスウエルの領地と比較してどや、愚かな事を、一年三十萬圓の所得ある人と……我れと……大なる相違あるは知れたる事なり……を、マクスウエルと云へば、我が數日前の手紙に就きて、彼れは何故に酬を爲さ

といきまく折しも食堂の扉を押しあけてキリヤムは恭しく一通の書状を捧げて主人の前に進みつゝ。而して此の書状に返事し給ふやどおのゝきながら主人の氣色を伺ひぬ。

恰がも宜しとうち笑みながら其手紙を披き見しボイス氏は見る／＼其顔色を變じぬ。

ボイス氏『返事とや。なし、なし、使をおひかへせ。』

と云ひながら手にせし書状をおし破りて爐中に擲げ投じぬ。

此等の様を見しボイス夫人は靜かに食堂をすべり出でぬ。思案に沈づみし父のかたはらにマーセラは立ちよりて、

マーセラ『父上、爐中へ投じ給ひし手紙はロード、マクスウエルの許よりか。して、其文の趣きは父上のお意こころにそむけるふしあるか。』

ボイス氏『然り。マーセラ。何ぞ彼老夫の無禮なるや。文を始るに三人稱を以てし。加るに我が依頼に直に答へずして執事と商議すべき山を云ひ送りぬ。汝

知らずや。彼の亡くなりし長子と我とは實に竹馬の友にして十四五歳迄は共に山に獵し水に漁せし中なるを。然るに老夫の何ぞ今日我を輕んじ、耻づかしむるや、よし、よし、我は我れにて我が意に適する樂を求めむ。』

日ごろ父の嗜好と其性質とに更に一點の同情を有せざるマーセラも流石親子の情に動かされて父の肩に手をのせ、きはめて慰むるが如き調子にて告ぐる、このごろロードマクスウエルの孫なる人と折々村中の會堂にて相遇ひし事あれば、彼に會ひて父の欲するところを告げて彼をしてロードマクスウエルの心を動かさむは如何とまめだちて言へば、ボイス氏もやがて氣色をなほし我が親しくせし友の忘れがたみの息子と我が嬢との交り親くなりもて行かむ事を喜びて、心の中には我若し失意の境にあらざりせばよき交際の友どちならむと思ひき。

マーセラは又心の中に何にとて我が父の此の莊園の主人となり給ひしよりは、マクスウエル家を始とし、近隣の貴き人々の父の爲めに彼等の門戸をさとし。むげに其交を謝せむとするにや。或は怕る我が稚わがけなきにわかわかに倫敦の家を離れて拾幾年のあいだ、親子其の居るところを異にせしは父上の社會に向つて或る面

なき事を爲せし結果にや。なぞと少しく猜疑の雲の胸の中にはびこらむとせし際は既に其身はボチットを戴き外套を被りてハーデーン氏を訪ふ途上にあり。

ハーデーン氏の住める家は牧師の家と稱して夫が支配する教會の側にあり。今日はこゝに集る慈善會の委員の人々の會日としてハーデーン氏とそが妹とはあさまだきより會堂の裡にあつて奔走の折りから、ミス、ハーデーンの君には會堂の裡にかと靜かに入り來るはマーセラなり。此時又一人の獵装を爲せし紳士あつて此の會堂に入り來らむとす。抑此人は誰ぞ。ロード、マキスウェルの愛孫アドルフス、レイボーン氏なり。

(111)

會堂の裡にはハーデーン氏とそが妹なるメリーとは、今しも様々なる花束と種々なる綠葉とを以て、經讀む壇を始として、四方の窓、さては衆人の席なるところを裝飾しつゝあり。

メリー「あゝマーセラの君、よくこそ來ませし、否、たしかに君の今朝の集會を忘れずして來ませむとを心待しつゝ侍りき。」

と云ひつゝ、マーセラの手より、そが携へ來りしそこばくの花束を受とりながら、許し給へと云ひつゝ、マーセラの頬にキスしぬ。

此の少くして肥肉なる妹に兄なるハーデーン氏もよく似かよひぬ。されど兄妹ともげにポイス夫人の評せしが如く、何となふ憂愁の氣色を眉宇の間に顯しつ。

この主人の少女と客なる貴女との談話のあひだ、いと手持不沙汰に會堂の扉のほどりにレイボーン氏はたゞづみつゝ、情も機會の悪しきとよ、この二三月前より隣村なるメロアの莊の愛嬢と三たび四たび相見しより、我が心どこともなくあこ

がるゝが如き心地し始めぬ。こは曾て我が嘲み笑ひしところの戀と呼ぶべきものによ、……果してそを戀なりとせば、そが源泉とも云ふべきゆかしき人に相接するに、神聖なる會堂の裡にて、我はむくつけき獵装しつゝ、犬をひき銃を携つゝあり。かの君の心の裡にて、さこそ無禮の人と見給ふらん事の心苦しさを、なぞと思案の折から。

メリー『こは思懸なし、レイボーンの公子、よくも我々を捨て給はずして來ませしものかな。』

レイボーン氏『我はあさまだきに、此近き山林をあさりて、小鳥にても獲むと館をば出むとせしに、祖父の君の、今朝このメロアの會堂に、集會のあると聞給ひて、温室の裡より種々の花と、綠葉とをすぐり出し給ひて、メリーの君とハーデンの君に捧げよと我に命を給ひぬ。』

メリー『あな、さても見事なる花束かな。こは何と云ひ、彼は何と云ふらむ。やよハーデンも見よ、マーセラの君、あん身は美しくしと思ひ給はざるか。』

常に隣村の大領主の心温く、情厚うして、細民をあはれむに感む、特にこのメロア

の會堂は其領分の内にあらざるにもかゝはらず、常に心づけのかひなでならざるに感激せし情の恰かも一時に發したらむが如くにあつく禮をば述べぬ。

マーセラ『實に、いとも美るはしき花束かな。我が父上の庭園にもそこばくの温室あれど、皆荒廢して、そが裡には花一輪もなし。只庭外の野花のみは香はなけれど、いづも御心に任せむ。やよ、メリーの君このごろの色や、付ばへる諸々の木葉もて裝飾なさば、いどめだからむ。』

メリー『そはめてたき御考かな、願くは指圖し給ひてよ。……あな、我ながら使なきとしつれ。あまり急ぎしまゝに、花鏝と細き線とを教師の家の卓上に描き忘れつゝ、……この物なくては裝飾の事なしあたらうまじ、いでや我一走してとりもてこむ……』

マーセラ『否、メリーの君、君ち在らずしては總てのといと便なからむ。我行きて取もてこむ。メリーの君よ、見給へ、空車ひく男の教師の家の方に行くを。……』と云ひつゝ、メリーの止むるまもなく會堂の外に走り出ぬ。

猶もさえざり止むる、メリーの聲をよき力草として、いかで我こそとてレイボーン

ン氏はマーセラのあとを逐ひぬ。

レイボーン氏『許し給へ、マーセラの君……我こそこの獵犬ととも一奔して花
 鉄と線とを得てかへりこむ。』

このレイボーン氏の言葉に對してマーセラはその歩をも止めず。又ふり向もせ
 ず。

マーセラ 否。我はこゝに留むよりも……我は寧ろ歩む』とをむ好。』

レイボーン氏『さらば、我をしてあん身と共に同じく行かむとを許し給ひぬ。我が
 思ふところによれば、牧師の家には新なる種々の花束の村人より贈りこせしもの
 澤山ならむ。あん身一人にては、とても携へ歸り給ふこと叶はじ。』

かくても猶マーセラの目は地上を離れず。
 マーセラ『されど、我はあん身の遊獵の妨を爲すを欲せず……君の樂のたうとき
 時を割かしむるを好まず。』

レイボーン氏『あん言葉の如く、我は遊獵の爲にとて館を出しなり。されど、急ぐと
 かけ、森のまもりなす者も鳥獸も我が來たるを待たむ。』

マーセラ『何處の森にや行き給ふ。』

レイボーン氏『キンドミルの岡なり。かしこには年老て、たよりなき者住す。常に
 彼は我が銃を携へてかの森に遊ばむとを希ふなり。そは我によりて温かき言
 葉となくさめを得むとすればなり。』

マーセラ『なにキンドミルの岡とや。あん身の父君と我が父とは幼なき折は常に
 かしこに遊びて、樂しき日を共に消しとありと、今朝、朝餐の卓にて父上の語りき。』
 祖父の君のいと辭すくなく、且つうちとけざる返事をマーセラの父なる人に、今朝
 おくり給ひしを知れるレイボーン氏の耳にはかく何氣のう云ひし、マーセラの言
 葉もこゝちよからざりき。

マーセラは又様々なる工を胸中に書きつ。

マーセラ『レイボーンの君、君の我をいと唐突なる女子と卑しめ給はんとは思へど
 も、我は君に一つ二つ説明を請ふ事あり。なめなる言葉としりぞけ給はずして
 御答給はらむとを。君も知り給ふ如く、君の父君と我父上とは幼なき折は實に
 隔なき竹馬の友にて在りき。又君のやからと我がやからとはいと親しく交り

しともよく君の知るところにお在するならむ。」

レイポーン氏「御言葉の如し。我も幼なき折にはかく思ひき。」

マーセラ「君は又我叔父なる逝きしラバートをも熟知してお在せしならむ。」

レイポーン氏「さなり、御言葉の如し、されど彼の人……」

マーセラ「我が言葉を終らしめ給へ。實に彼の人には固陋にして、常に人に會ふことを避け嫌ひ、莊園の外へとは一歩も出でざりしかば、又いたく隣村の人々にも嫌はれぬ。されど一度は彼も御交を辱のうしき。されば、お父上と我父とも親しき友どちにてお在しき。又おんうからと、我やからとも交ありき。さるを何故なれば、こたび我父の此莊園を襲ひ給ひしより、すでにそこばくの月日立ちはべるに、未だ一度も君の叔母君は我母を訪ひ給はず。又マクスウェル子爵の我が父に消息贈り給ふに、文をやるに三人稱を以てし給ふは如何なる由縁にや。願はくは我が言葉のむげにうちつけなるを捨て給はずして明白に我まどひを解き給はむとを。」

と云ひつゝ、まともになりてレイポーン氏をたど見し夫の貌、夫の姿、夫のふるま

ひもの凄き迄氣高く美しく、如何なる妙なる俳優人と雖やはかこれにはまさらむ。

この氣を負ひしマーセラの言葉の一句一句ごとに調子の高まり行くに従ひて、レイポーン氏の面上の紅潮の度相増しぬ。避け得べき限は避け。遁れ得べき限は遁れむと今迄にをつぐみてるたりしレイポーン氏もこゝに至りてはせんすべなくやをら思ひ定めて口をひらきつ。

レイポーン氏「君の聽かむとする理由に就ては、我は如何にしても夫を話さんとを避けむと願ひしかど、君の切なる御言葉に對して、黙さむも禮にはあらじと思定めて、これより君に告げまいらすは重に道聽途説にして、我も事の眞疑を疑ふものなり。其心して聽き給へ。我幼なき時なりき。君の父上の未だ國會議員の榮職に居給ふころ……夫の當時の議會に怪しからぬ醜聞に關する事實あつて、賄賂に管せし事とか聞きし、ボイス氏は夫の連累の一人にて在しき。夫の結果はいたく君の祖父君の——特に我が祖父と交厚かりしところの——健康を害ひ、それよりいくばくもなくして君の祖父君は逝き給ひき。やよ餘りに驚せ

へ聞しが。今農夫等のいと重々しき敬禮に對して悦びの氣色を顯はし給ふは少くおん主義の反對なる貴族主義の面影を示し給ふにはあらざるか。』
と戯れ問ふはすでに、マーセラが胸の怒濤のこの静けき景色の爲にうちやはらぎたると知ればなり。

マーセラ『おん身は我が一貫の主義にとほしきを笑ひ給ふかは知らねど。村中のもの特に可憐なる少さきものゝ我を見る毎に領主の嬢よとて途上に遇ふ度に厚く禮なすはいとこゝちよきものにあらずや。……嗚呼、憐むべきメロアの村。汝はいかがしてかくの如く幸なきよ。先には固陋にして恰ど狂者に近き領主にあひ。今は又貧しうして隣村の爲に交を謝せられし領主を戴く。嗚呼、まさしく朽ちなむとする汝の水道。その水に養るゝ汝の幼者の顔色の生氣なきとよ。我が心はやたけにはやれど我に力なく黄金なきを如何にせむ。嗚呼、誰れか我を輔けて汝を此沈衰の裡より引き起し荒廢を鋤きくつして新なる精神を與ふるものぞ。』

レイポーン氏『願はくは我をしてその崇む可く尊む可き博愛の事業の後援者たる

しめ給へ。』

と云ひつゝ、足下に咲ける「旅客の樂」の一もとをやをら摘みとりて、今日の誓にせよとて獵裝のとあるポケットの裡に汝めぬ。

マーセラ『やよ、レイポーンの君いつまでも我をしてその誓のもとに束縛し給ひぞ』
とうち笑みながら云ふ時はすでに牧師の家の門にありき。〔三終り〕

「マアセラ」梗概を中止するに付きて

三二

掬香野客

本綱要第五號より七號に涉りて抄譯し來たりしところのワード夫人の作なる小説「マアセラ」を今度中止するに付きて、一言其理由を、本綱要を購ひ閱し給ふところの大方の讀者に聞えむとす。

抑「マアセラ」が如何なる小説なるかは我曾つて其梗概の小引に於いて少しく斷りをきぬ。今年の春始めて其梗概の稿を起すや、我意は少なくとも本綱要の二ヶ年に涉るを期したりき。然るに今夏我家に病める人出てきて、我筆を把ることを許さざりしに加へて、綱要編輯の當局者も同一の作の餘りに長期に涉たるを喜ばざる由を告げられしかば、我は斷然再び其稿を續ぐ念を絶ちぬ。

願み來たれば、我文章の趣味無きに加へて、其文字の鹵莽の厭ふべきに、この十九基督世紀の後半、英國の文壇に嶄然として一頭角をぬきんとしところの大作の抄譯に指を染めしは、いと無禮なる業なるに、夫を半ばさへ未だ終らざるに、中止するは、

原作者たるワード夫人に對し、又大方の讀者に對して罪の大なるを謝するに辭なきを恐る。「マアセラ」の趣意と其結構の概略とは我が曾つてもものし、小引中に記しをきしゆへに、爰には再び其巧處、妙處を擧ぐるの要なけむ。抑本編の女主人公「マアセラ」が其始めは極端なる社會主義を極致とせしかど、漸うやく浮世の怒濤中にもまれて、こゝに事物の裏面を識別することを得るに従ひ、其始め懷抱せしところの單純なる空想境裡より脱し來たつて、遂には真正なる社會主義、社會と個人と圓滿に融化渾成せし理想に達するを得るの經歷を叙し、傍ら今の英國の名士を拉し來たつて、彼國の政界を曲盡す。實に思緒雲霧、詞鋒景煥、一世を横絶するの概あり。編中の男主人公にして、ロチド、マクスウエルの愛孫たるアルドウス、レイボオン氏は最も進歩せし貴族的政治家の精華の擬人にして、マアセラ並にレイボオン氏の連鎖たる溫籍俊秀にして、仁慈の情に富みたる、エドワード、ホオリン氏は彼の牛津堡にあつて、哲學をクリオンに學び、經濟をロオヂヤアスに修め、業成るに及んで、ベリオールに於て、印度派遣の學生に對して、専ら歴史、經濟の講義を爲し、又出ては、倫敦の西端に貧民を集めて、最も明晰なる言語を以て經濟倫理、其他宗教

「マアセラ」梗概を中止するに就きて

三三

の眞理を説き、其熱心なる舌鋒は以て、滿堂の人心を感動せしめ、其感化は延て今のトインビー館の設立に至らしめ、以て交友と他人とに論なく、其不幸短命を痛恨嗟歎せしめしところの「英國産業革命史」の著者たるアアノルド、トインビー氏なり。而して又編中の立敵にしてレイボオン氏に對してマアセラの競争者たるハアリ、イワアトンは其の政治的立脚地を始め極端なる社會主義に起し、中ごろクラッドストン翁と愛蘭黨とを賣りて、デボンシヤ公と共に自由的一致派を作り。今日に於いては滔々たる勢力、赫灼たる威權を有して、天下の豪傑を睥睨する今の英國の殖民大臣、大帝國主義の鼓吹者、南亞戦争の發起者たるチセア、チャンバレイン氏其人なり。如上編中に出づるところの人物。皆悉く當代の名士にあらざるはなきに、殊に編中の巧處とおぼしきは、彼國の議院の様を寫し出せしところにして、政府の委員たるレイボオン氏と労働者の代表者たるホウリン氏との闘論の如き、其の聽衆の中に交るマアセラが如何に先の訂婚者たるレイボオン氏と、今の我に對しての崇拜者たるホウリン氏の論辯を聽き、其の舉動を寫し出せしが如き、實に看客をして或は眉軒り氣伸び或は手に汗を握らしむ。我は竊かに彼國の議院の様の如

何に典雅莊重にして、威嚴あるかを我が拙なき筆にも寫しあらはして。常に我國議院の現狀に満足し給はざる讀者に見せまつらむとは我心裡に書きて樂しみしところなりき。願くは讀者にして若しマアセラの可憐嬌痴なるに同情を表し給ひ、我筆の拙惡なるを嫌ひ給はずんば又勤めて來む歳は改めて復び几を拂ひ硯を洗ひて別にこの稿を起さむことを欲す。

明治卅四年臘月六日 於臨川書屋

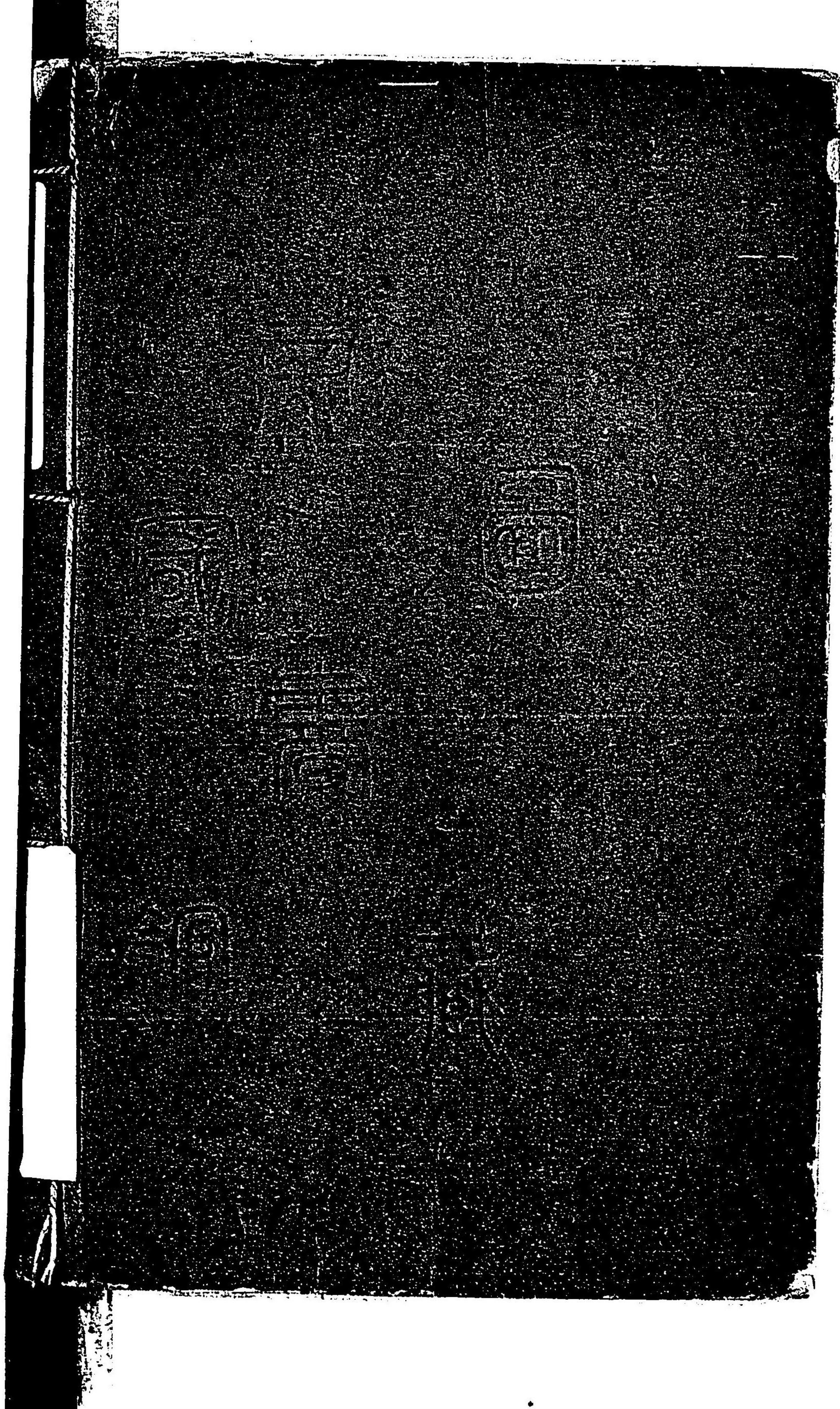
掬香 千葉 鑛 識

41
102

登張氏の『フラウ、ゾルゲ』梗概も本號に於
て完結の筈なりしが述者の都合により
またの折を期することゝなせり。

(編者識)

名著
文教



名著網要
學教育網要
如史作「マーセラ」梗概

41
102

マーセラ梗概

101376-000-2

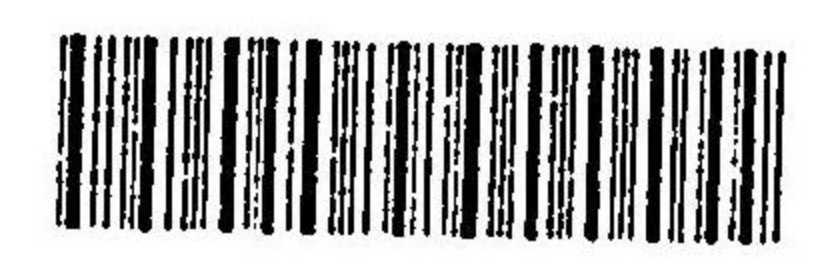
41-102

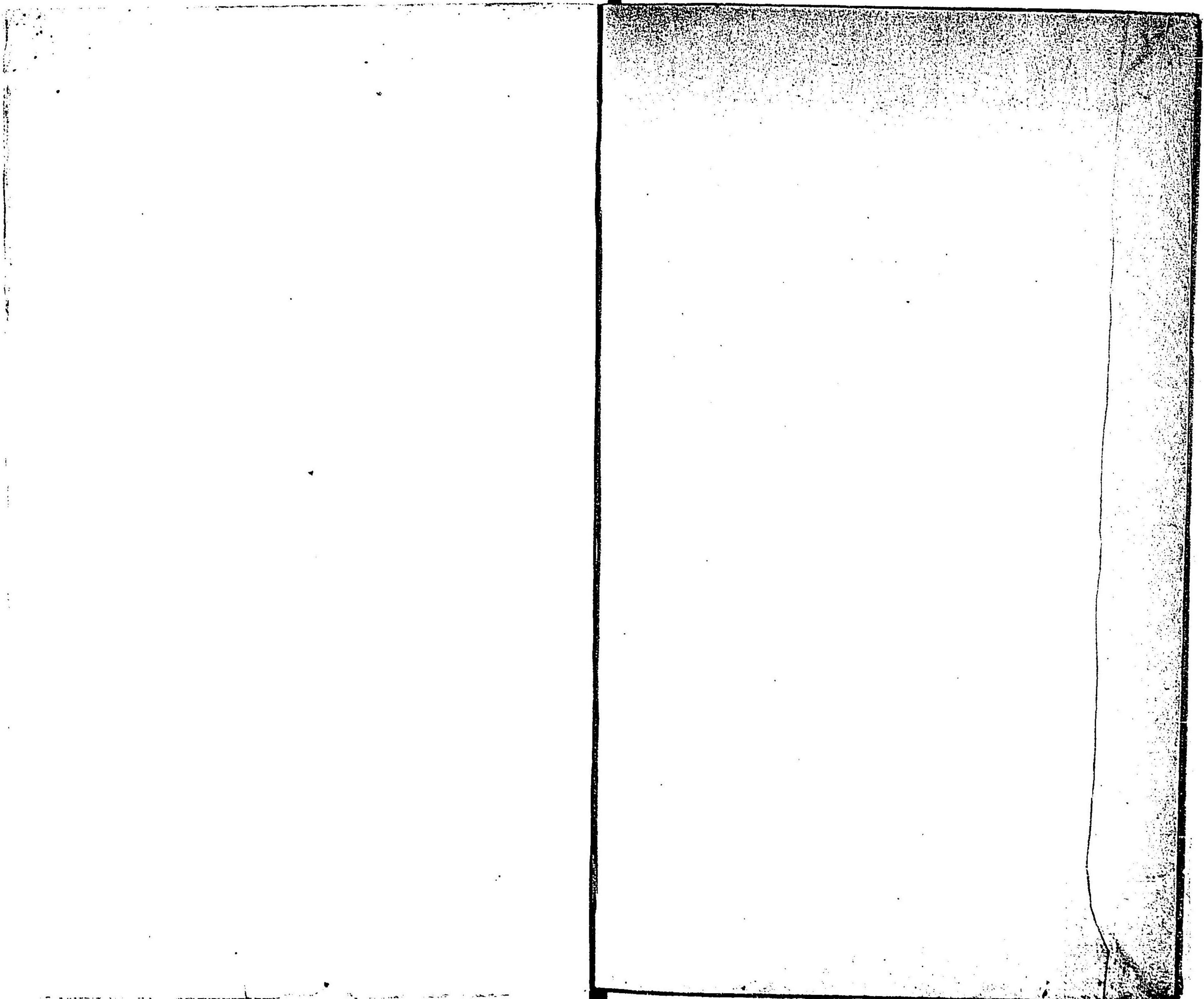
マーセラ梗概

ワード/著

〔刊年不明〕

DBY-0709







【マセラ】著者
ハムフリー、ワード女史